

新資料・広津柳浪「父の故郷」紹介

―『台湾愛国婦人』第六〇巻掲載小説―

下岡 友加

広津柳浪（一八六一―一九二八）は悲慘小説、深刻小説の書き手として明治期を代表する作家である。柳浪の作品が明治文学において果たした役割は「当時の多くの皮相的な人情小説に対して、人間の暗黒面を描くという異なる要素を加えたこと」（宇佐美毅^①）とされる。

一八八七年「女子参政層中楼」に始まる作家活動は「明治二十年代末から三十年代初頭の数年間」を「頂点」（森本稜^②）とし、その「文壇的地位は、深刻小説時代の余勢をかつて、三十六、七年頃までであつたよう」とされている（福田清人^③）。よって、柳浪の主たる活動

は「明治四十五年（一九一二）二月「太陽」に発表された「迷」あたりで大体終止符を打った」（岡田桜子^④）と区分別れるが、この同年及び翌年に〈外地〉雑誌に掲載された小説が「幼き記憶」（目次は「幼き日の記憶」「台湾愛国婦人」第四二巻、一九一二・五）と「父の故郷」（『台湾愛国婦人』第六〇巻、一九一三・一一）である。両小説ともに『近代文学研究叢書 第二九巻』（昭和女子大学、一九六八・一〇）等、旧来の年譜には未掲載の作品である。

『台湾愛国婦人』（一九〇八・一〇～一九一六・三。全八八巻）は、愛国婦人会台湾支部の機関誌であり、日本統治初期台湾における総督

府の政策履行後援のためのプロパガンダ誌であつた^⑤。同雑誌は〈内地〉の著名作家たちの文学作品を数多く掲載している点に一つの特徴を持つており、寄稿者には硯友社同人や博文館関係者が多く存する。かつて博文館につとめた経験もある硯友社同人の柳浪に執筆の声がかつたとしても不思議はない。また、当時期は『柳浪叢書』（前編一九〇九・一一、後編一九一〇・六）を博文館から出版した直後でもあり、そうした縁故から寄稿が行われたものと考えられる^⑥。

ただし、『台湾愛国婦人』への寄稿は、実は柳浪よりも息子である広津和郎（一八九一―一九六八）の方が半年ほど早い。和郎の最初の寄稿は小説「ヴァイオリンを持ちたる女」（第三六巻、一九一一・一一）である。その後も、和郎は小説「病院」（チェーホフの翻訳）（第四六巻、一九一二・九）、「少年小説 籠の失敗」（翻案）（第五九巻、一九一三・一〇）、続いて柳浪「父の故郷」掲載と同巻の第六〇巻（一九一三・一一）にごく短い感想（「五年前の回想」）を寄せている。いずれも『広津和郎全集 第三三巻』（中央公論社、一九七四・一一）等、旧来の年譜未掲載の作品であり、和郎の早稲田大学在学中から卒業年にかけての寄稿である。おそらくこれらは、柳浪の執筆

減少に比例して生活に窮するようになっていた広津家における和郎の「アルバイト」（広津和郎『年月のあしおと』⁽⁷⁾）の一端と位置づけられる。一六歳以降、各雑誌への投書⁽⁸⁾や翻訳仕事により、小遣いや生活費をまかなっていた和郎は、父の友人でもある石橋思案や巖谷小波に原稿を買ってもらっていた。その際、「巖谷さんは少年世界の主幹であったが、原稿の種類によって、同じ博文館から出ている中学世界や冒険世界に振り向^{「マ」}けてくれた」⁽⁹⁾とも和郎は述べている。ちなみに、思案と小波はいずれも『台湾愛国婦人』の寄稿者でもあった。『台湾愛国婦人』掲載の和郎の作品は同雑誌のために書かれたものというより、和郎の原稿を受理した小波たちの方がそれを『台湾愛国婦人』へ、いわば埋め草的に振り分けた可能性が高いと考えられる⁽¹⁰⁾。

なお、父・柳浪の小説が扉付の附録小説欄巻頭（「幼き記憶」）や、創刊五周年記念号である第六〇巻文芸欄巻頭（「父の故郷」）に置かれた上、それに見合う質・量を担保しているのに比して、息子^{「息子」}の和郎の作品は特に取り上げるべき内容を備えているとは言いがたい。いかに主流を離れたとはいえ文壇に名を馳せた柳浪と、「奇蹟」創刊前後の出版期における和郎の両者の格の違いが誌上からは看取される⁽¹¹⁾。

さて、『台湾愛国婦人』掲載の「幼き記憶」「父の故郷」の内容はいずれも、柳浪自身の幼少期に取材したものである。「自伝的な文章がきわめて少ない柳浪にしてはめずらしく幼時について綴ったもの」（村松友規⁽¹²⁾）としては他に「幼時」^{「幼時」}（『太陽』一八九八・一二）がある。『台湾愛国婦人』掲載の二小説とともにこの「幼時」と一部内容上の重複が見られる。「幼き記憶」の方は、「幼時」の持つ一

〇のエピソードのうち、最初に掲げられた「迷子」の内容を取り込んでいる。そして、そこで迷い子となった「私」を背負って村まで送ってくれた善兵衛の家庭の不如意が次第に明らかになっていく展開である。善兵衛はやがて家族を捨てて家を去り、残された後妻は非業の死を遂げ、二人の娘も長女は駆け落ち、唾の次女は乞食となる⁽¹³⁾。このように、「幼き記憶」が「幼時」の内容を踏まえていることについては、既に上田正行が『台湾愛国婦人』掲載の様々な文学作品をとりあげる中で、次のように指摘している。

数ある作品の中の長編で読ませたのは広津柳浪の「幼き記憶」

（42巻）であった。（…）少年が漢学修行のために長崎から肥前

酒井村（佐賀県）の伯母の家に寄寓して、そこで見聞した村の様子や人間模様を描いたものである。かつての悲惨小説の書き手らしく、善兵衛一家の家庭崩壊劇の過程が見事に捉えられている。

先妻の子で智慧遅れのお新、姉のお春、後妻のお金^{「お金」}が善兵衛との関わりで様々な人間模様を織りなし、人生のダークサイドに迫っている。自然主義的技法を生かしたリアリズム文学の一つの成果と言っている。尚、その作は旧作「をさなきほど」（『太陽』明

31・11）を踏まえていると思われる。どのように小説が時間と共に発展して行ったかを検討するのも面白い。（「『台湾愛国婦人』という雑誌の意義」『台湾愛国婦人』の研究 本文翻刻篇（國學院大學、二〇一四・二、二四頁）

上田は「幼き記憶」を「読ませ」る長編として高く評価しており、

稿者もこれに同意する。「幼時」が会話を一切用いず、語る現在の「自分」の立場から過去を概略して述べているのに対し、「幼き記憶」は会話（方言）を多用し⁽¹⁴⁾、語る現在の「私」による認識や述懐のみならず、語られる幼い「私」の視点を生かしてより現前性に富んだかたちで出来事を叙述している。同様のことは「父の故郷」にも該当する。「父の故郷」は「幼時」の三番目と四番目のエピソードとなる内容を「私」の性質を象徴する出来事として紹介した上で、右脚が立たず、「歩むどころか立つことさへ出来な」くなった「私」の大病とその後の久留米時代を主に語る。「幼時」を執筆した際、三七歳であった柳浪は「幼き記憶」「父の故郷」執筆時には五一、五二歳となっていた。後者の方が実際の体験からより長い時間を経ているにもかかわらず、逆に語られている出来事は詳細である。各エピソードの連関性も考慮されており、『台湾愛国婦人』の二小説を見る限り、柳浪の腕は決して衰えていない。

柳浪自身は『柳浪叢書』前編刊行の際、「幼時」について「九歳の春漢学修行の爲め、同じ肥前国田代在の酒井村へ行つて、其処に二年近く居た。此頃の私の生活は、本書の末尾に載せてある「幼時」に其幾分を書いて置いた」と言及している（広津柳浪「柳浪叢書」序⁽¹⁵⁾）。同叢書をまとめるにあたって柳浪は自身の経歴を「序」として掲げることを求められた上、旧作「幼時」を再読する機会を得た。そこで「幼時」に不足をおぼえ、新たな情報を大幅に書き加えて「幼き記憶」「父の故郷」を書き下ろすに至ったのではないか⁽¹⁶⁾。また、『台湾愛国婦人』という中央文壇からは離れた〈外地〉の婦人雑誌という媒体が、自らの経歴に基づく小説を公にすることを柳浪に許容する

〈場〉として機能したとも考えられよう。

『台湾愛国婦人』掲載二小説のうち、「幼き記憶」本文については『台湾愛国婦人』の研究 本文翻刻篇（國學院大學、二〇一四・二）に末尾を除く大半が翻刻されている。さらに三人社から『台湾愛国婦人』明治期の復刻版が刊行され、長らく稀覯本であった同雑誌の通覧が可能となった⁽¹⁷⁾。よって、以下では公の機関に所蔵がなく未だ復刻の行われていない大正期の『台湾愛国婦人』第六〇巻（稿者私蔵）に掲載された「父の故郷」について若干の説明を施した上、小説本文を掲げることとする。

「父の故郷」は八つの章で構成されている。小説中では、柳浪の幼名金次郎が「金二郎」、兄正人が「正之尉」、弟武人が「精三郎」、漢学を学ぶため預けられていた磯野家が「磯貝家」と記されている（妹のぶは「おのぶ」のまま）。

冒頭から小説は「私」＝金二郎が一〇歳の時に罹った大病を語り始める。「私」は「九ツの年明治二年」から伯父伯母のもと（肥前国田代在酒井村）で暮らしていた。その「私」が「きかぬ氣の腕白者で村中の憎まれ者」であったことを示す具体的なエピソードとして、二つの「失策」が紹介されている。一つは年上の女の子の背中を斬ってしまったこと、もう一つは十王堂に収められていた三途の川の奪衣婆の木像を破壊したことである。これら二つのエピソードが先にも触れた「幼時」の「少女を斬る」「三途河の奪衣婆」と重なる内容である。

四章では病を得て歩けなくなった「私」のもとへ長崎から母が妹と

ともにやって来る。続く五章で「私」は父の指図により、母と兄妹たちと久留米市Ⅱ父の故郷へ移る。朝鮮へ出かけている父不在の中、一家はまず「私」の祖母と父が幼時に住んでいた紺屋町の富津家へ入り、その後、田町の綿屋の隠居所を借りて住みはじめた。五章以降は「私」が一一歳時（明治四年）の内容である。「私」の久留米での日常生活のみならず、久留米藩士の家の次男として生まれた父の経歴、及び長崎の町家出身の母の立場について、小説は詳細に語る。武家の誇りや家柄について度々言及される背景に、明治の世になって間もない時代相が浮かび上がっている。

小説であれば多少の脚色は当然存するはずであるが、祭の日に長崎で作った妹の豪華な着物が他郷の人の妬みをかう場面（六章）や、「私」が漢籍の覚えがめでたいが故に乱暴者の河原虎太郎にしつこくからまれる経緯（六・七章）、月々の生活費は父が他家に預けていることから全く自由にはならないにもかかわらず、無心に来る親戚への対応に苦慮する母の様子（七・八章）など極めてリアリティに富む。特に父不在の家を守るために苦慮し続ける母の姿は印象深い。父から菓子箱に入られた大金が送られて誰にも知られぬよう隠したにもかかわらず、翌日にはそれを知る他人が母へ早速借金を申し込みにあらわれるなど、意表を突く展開もある。悲惨な結びを置くことが多い柳浪の小説であるが、ここでは母が『私はまた生きたゝい。』と希望を得るまでが描かれており、読者を安堵させる。

「作品から自己の姿を消すという技法的な努力を続けることによって題材の範囲を拡張、救いのない仮構の世界を再構築するに至った」（塚越和夫⁽¹⁸⁾）と一般的には把握される柳浪文学であるが、逆に自

己（「私」）の視点と経歴を生かした数少ない小説世界の例として「父の故郷」はある。柳浪の「晩年」（岡田桜子⁽¹⁹⁾）の技量的一端とその履歴を補う言説の一つとして⁽²⁰⁾、「父の故郷」は貴重な小説であると位置づけられよう。

「父の故郷」は『台湾愛国婦人』第六〇巻文芸欄・五七頁〜九七頁に二段組みで掲載、原文総ルビ。翻刻にあたってはルビ・圏点は原則省略し、漢字は新字体に統一、原文に欠落していると考えられる句点及び閉じ括弧については私に補ったことをお断りする。

注

- (1) 宇佐美毅「広津柳浪」『尾崎紅葉事典』翰林書房、二〇二〇・一〇、二二六―二二七頁
- (2) 森本穫「『今戸心中』論」『定本広津柳浪作品集 別巻』冬夏書房、一九八二・一二、四三頁
- (3) 福田清人「柳浪の葉書」『日本現代文学全集』月報95、講談社、一九六八・八
- (4) 岡田桜子「広津柳浪」昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書 第二九巻』昭和女子大学、一九六八・一〇、四〇一頁
- (5) 『台湾愛国婦人』の基本的性格については、拙稿「雑誌『台湾愛国婦人』の性格―プロパガンダ、そして近代文学発生の場として―」（『県立広島大学人間文化学部紀要』第5号、二〇一〇・一二）、上田正行「台湾愛国婦人」という雑誌の意義」『台

- 湾愛国婦人』の研究 本文翻刻篇』（國學院大學、二〇一四・二）、『台湾愛国婦人復刻版別冊 解題・総目次・執筆者索引』（三人社、二〇二〇・一一）等を参照。
- (6) 一九一〇年の柳浪日記に目を通した紅野敏郎は、その住所録に博文館の大橋新太郎、坪谷善四郎の名があることを記している（「広津柳浪日記」（新資料）を読む『文学』一九八一・六）。
- (7) 広津和郎『年月のあしおと』講談社、一九六三・八、一三七頁
- (8) 和郎の投書時代の作品の一部は『広津和郎全集 第一巻』（中央公論社、一九七三・一二）に収録されている。
- (9) 注(7)に同じ、一三七頁
- (10) 一九一〇年の柳浪日記を読んだ孫の広津桃子が「一日として、和郎という父の名の出ない日はないのである」（『父 広津和郎』毎日新聞社、一九七三・八、三二頁）と述べているように、柳浪と和郎の関係は非常に近しく、父から子へ、或いは子から父へと同誌への寄稿が促された可能性も当然存する。
- (11) ちなみに、父と自身の作品をともに収めた『明治大正文学全集 第九巻 広津柳浪・広津和郎』（春陽堂、一九三〇・四）を編んだ和郎は同書に「事業なら父の達したところから子は始められる。併し文学ではさうは行かない。子は又いろはから始めなければならぬ。父子二代の集を輯めて見て僕の感ずる淋しさはそれだ」（「筆者筆蹟」四一四頁）と記している。
- (12) 村松友視「解説 柳浪好み」坪内祐三・村松友視編『明治の文学 第7巻 広津柳浪』筑摩書房、二〇〇一・一〇、四一八頁
- (13) なお、この唾の娘が乞食になったという設定は「幼時」の二番目のエピソード「孤屋の唾娘」とも重なる点がある。
- (14) 会話を重視する柳浪の価値観の一端は、広津和郎が父は「総ての地の文はみな説明であるという風にさえ考えたい。そして会話だけで書こうと考えたい。何かの場合に森鷗外氏にその話をしたら、「だが、それは損ではないか」と鷗外氏が云ったという話を父は私にした事がある」と記したエピソードからもうかがえる（「父柳浪について」『現代日本文学全集7 柳浪・眉山・緑雨集』改造社、一九二九・三。引用は『広津和郎全集 第三巻』中央公論社、一九七四・一一、一五三頁に拠った）。
- (15) 広津柳浪「柳浪叢書」序『柳浪叢書』前編、一九〇九・一。引用は『定本 広津柳浪作品集 下巻』冬夏書房、一九八二・一二、七四七頁に拠った。
- (16) 「幼き記憶」「父の故郷」のあいだには、やはり柳浪自身の経歴に基づく「花ちる頃」（『文芸倶楽部』一九一三・七）も発表されている。そこでは主人公富田金二の家で弟の精三が脚氣衝心で亡くなるまでの様子が主に描かれている。ただし、『台湾愛国婦人』掲載二小説の「私」語りとは異なり、あくまで三人称客観小説の体をとった作品である。
- (17) 『台湾愛国婦人 復刻版』明治編（全三八巻、別冊二）、三人社、二〇一九・七・二〇二〇・一一
- (18) 塚越和夫「硯友社―広津柳浪を中心に―」『日本近代文学』第18集、一九七三・五

(19) 岡田桜子「広津柳浪」(注(4)に同じ)、四一四頁

(20) 講談社版『日本現代文学全集11』(一九六八・八)の「広津柳浪年譜」「広津柳浪参考文献」を編んだ岡保生は「一体、柳浪には幼時のことを回想した文章が少ない」ため、「従来の年譜」が博文館版『柳浪叢書』前編序文並びに小説「幼時」の記述に基づいて編まれる他なかった事情について論じている(「柳浪年譜の問題点二、三」「学苑」、一九六九・一)。

父の故郷

(一)

私は突然病気に罹った。それは半年以上も腰が立たないで、此儘片輪者になるのではないかと危ぶまるゝほどの大病だったのである。

其時私は十歳だった。きかぬ気の腕白者で、村中の憎まれ者だった。私を預かつて居られた伯父も伯母も、乃至は従兄夫婦からも持余されて居た。けれども、伯父にも伯母にも大層可愛がられて居た。毎日読書習字の稽古に通った海円寺の老僧梅隠和尚も酷く私を可愛がつて呉れられた。

私は私ぐらゐの年輩の子供としては、物覚も善かつたし、道理も解る方であつた。それであるのに、伯父や従兄に非常に譴責られた事が二度あつた。尤もちよとした小言を喰つた事などは、数かぎりも無かつたのである。

一度は私より二三歳年長の女の脊を斬つたのであつた。それは一寸した言葉の行違から、私は其女を眺みながら云うた。

『汝そぎやん事云ふと斬ッぞ。』と、私は短刀の柄に手を掛けた。『斬ッなら斬ッてお見んさい。』と、女は青く膨れた顔に嘲笑ひながら云つた。

『乃公が斬い得んと思ふとツか。』

私は抜打に、打下したと云ふのではない、短刀の刃を女の脊に当てゝ引いたのであつた。それでも切れるには切れたのである。生憎女の脊に、著物に破れた穴があつた。――農者の娘の不断著にはあり勝である――其穴から食出た肉に赤い筋が見えた。私ははッと思つた。

女は斬られて創が出来たとは思はなかつたらしかつた。

『お前ん如たる者に、人が斬れツもんか。』

嘲ける様に斯う云つて、女は自分の家の方へ馳出して行つた。

私は物の道理を弁へないほどの腕白者と云ふのでも無かつたから、女の脊に見えた赤い筋は非常に気懸りである。伯父の家に帰るのも氣味が悪かつたけれども、私と帰つて孟子の参の巻を声を挙げて復習して居た。――女の家から其親か何かゞ苦情を持込んで来さうなので、胸がわくゝして復習に氣の入らう筈は無かつたけれども。

女の父は果して来たのであつた。十歳ばかり年長の従兄が私の復習して居たところへ来た。

『ちよいと来んさい、話があッから。』

私はぎよツとした。そして、如何する事も出来ないで、従兄の云ふまゝに其後に従いて行つた。伯父の室の前を通る時、伯父は可怖い眼をして、伯母は心配さうな顔をして、私を見られたのを、私はちらと見ると、非常に可怖い様な悲しい様な氣がした。私が其よりも辛く思つたのは、玄関の光景を見た時だった。私が脊に創を負はせた女の父

が、赤黒く光った巖^{がん}畳な顔に、勝へ難い怒気を眼に集めて、私を睨^{にら}んで居る——其背後にはちよいと数へられないほど大勢、村内の子供等が眼を光らせて居た。

私は女の父の前に据ゑられて、謝罪せられるものと思つたので、齒を切りながら其方へ歩んだ——非分は私にあらうとも、武士の子が農者の前に叩頭などするのは、殆どあり得べからざる耻辱だと考へたからであつた。

『此方へ来ごさい。』

従兄は私を座敷へ連れて行つた。そして、そこで私の顔を可怖い目で睨据^{にら}ゑた——平生から血走つた様な眼をしては居たが。

『足下は——従兄は私をよく斯う呼んだ——善右衛門が娘を斬い御座ツたさうなが、そいに違ひなかぢやろな。』と云つた従兄の語気は、存外私の耳に穩かに響いた。

私は首を垂れて黙つて居た。

『違ひなツか。』と、従兄は急込んで云つた。

私は首肯いた。

『何故口で返答を為んか。口が無か。』

『斬つたとぢやあいません。背中へ筋を附けただけでがんですが……。』と私は呐りながら答へた。

『筋を附けたちか。筋とは何かア。』

『赤い筋……著服が破れとつたから。』

『赤い筋、血のか。』

『針で搔いた如たる筋が……。』

『何の事かア、そいが短刀で斬つた創ちゆうとか。』

従兄は笑出しさうな顔をしたが、忽ち緊張した表情に返つた。『何様小さな創ちやろと、他人へ附けて済むと思ツとるかの、足下は。』

私はまた黙つて居た。

『人を斬つと、自分は切腹せんばならん事は知つとるぢやろの、足下も武士の家に生れたぢやから。』

従兄は腰にして居た小刀を私の前に置いた。

『これで切腹しごさい、乃公が見聞して遣ツから。』

私はぎよつとした。併し、腹を斬らうとは思はなかつた。相手は農夫の娘である、而も創は針の尖で引搔いたほどの創だ、それに乃公が切腹する、其様事のあらう理が無か。相手が死んどるなら、乃公も切腹するけれども——私は斯う思つて、なに切腹するものか、従兄が何と云はうとも、断じて腹は切らないと決心した。で、黙したまゝ身動もしなかつた。

『足下は切腹し得んとか——生命が惜しかとか。』

と云つて、従兄は私の顔を見て居たが、言葉を継いだ。『武士の子が生命を惜しか。切腹し得んとか。かう、如何かの。』

私は一層口を堅く結んで、眼を一杯睨いて畳を凝視めて居た。

『何かア、其顔は。』従兄は其時のしぶとい私の顔が憎かつたのだ。

『此卑怯者が。此臆病者が。腹も切り得ずと、其しぶとい顔は。』

私は憤然とした。くわつとなつて其脇差を手を取つた。

『乃公に之を貸しごさい。』

『切腹すツとか。』

『うむ、切腹すツ……けんが、彼女子を斬殺いて来てから切腹すツ。』

私は脇差を持つて立上った。

『莫迦が、何すつとか。』

『莫迦でも可か。』

馳出さうとした私の帯を後から引攫^{ひづ}んで、従兄は其の膝近くへ引倒した。そして、隙さず脇差を取上げて。

『何ちゆう莫迦か、汝は。』

私は既う泣いて居た。

『莫迦でも可か。彼女子を斬つて来て、切腹するけんが……。』

私は脇差を持つて従兄の手に飛付いた。直ぐに突倒された。従兄は私を突倒して置いて、脇差を腰に帯びると、私を宙に引提げてそして俵でも担ぐ様に肩に担いだ。私は声を上げて泣いて居た。

『何様^{ど様}為なさつとかな。』

従兄が私を担いだまゝ庭下駄を穿いた時、柔順^{おとよな}しい従兄の若い妻は問うた。

『此様しづとい奴は……。』

私は裏の竹藪の中の味噌蔵に押籠められたのであつた。蔵には内を明るく見せるほどの光線の入る窓も開いて居らないらしかつた。自分の手を見る事さへ出来ないほど暗かつたのであつた。十歳だつた私は、此暗いのが非常に気味が悪かつたので、見えもしない彼方や此方を見廻して、何時までもとなく泣いて居た。

私は何時間味噌蔵の中に居たのか知らないが、伯父の家に常に出入をして、何かの使役^{つかひやく}きして居た伝八と呼ぶ老人が蔵から出して呉れた時は夜であつた。それでも蔵の中よりは遙かに明るかつた。塞^{ふさ}つて居た息を俄かに吹返した様な気がして、われ知らず深い呼吸を続けたの

であつた。

女の親との交渉は如何なつたか聞かなかつたが、無事に済んだらしかつた。伯父伯母従兄等への詫^わは、伝八の取成で事なく済んだ。唯中に刀のある短刀を帯する事を禁じられて、木刀を以つて代へられたのであつた。

今一つの失策と云ふのは、十王堂に在つた三途の川の奪衣婆^{だつえば}の木像を破毀した事であつた。

私は其日そつと短刀を取出して帯びて居た。久振に短刀を抜いて、若い木の枝などを切るのが堪らないほど嬉しかつた。

『この婆は何ぢやろか。』

私は此十王堂に今日始めて入つたのではない、閻魔大王の像を中央に、左右に十王の像が駢べられ、一段下に相向の兇惡な老婆の像が置かれてあるのも、私は今始めて見たのではなかつた。だが、如何したのか不図其老女の何者であるかを問うて見たのであつた。

『三途川のお婆さんぢやけな。』と、一人の子供が答へた。

『三途川の婆か。人が死んで行くと、著服を脱いで奪^{うば}るとぢやろ。』

と、私は憎い婆だと木像を睨みながら云つた。

『さうすつとげな、私どもゝ聞いとりますばい。』

と、其子供が云つた。

『憎くかぞ、此婆。』

私は短刀を抜いて老女の木像へ切付けた。無論切れ様はずは無い、僅かに傷が付いたばかりだつた。私は癩癩まぎれに其木像を取つて床へ打著けた。尚ほ飽足らないで、堂の外へ持出して、沓脱の石へ打擲^うけくしたので、木像は二つに割れたのであつた。私は其小さいの一

片を削つてねツきに拵らへた。

『誰でも来え、勝負すツから。』

私は斯う叫んで、其ねつきを地上に抛つたが、土が固かつたので刺さらないで跳反つた。

『此婆地にも刺り得んぞ。』

私は流の清い水屋川へねツきを投込んだ。他の子供達が驚愕の眼を睥つてるのを、私はさも勝れた勇者でゝもある様な気がして、伯父の家へ帰つたのであつた。

十王堂は疾から荒るゝに委せてあつて、堂守なども居なかつたのであつた。其が私の為には僥倖で、二三日は此事が伯父や従兄の耳に入らなかつた。尤も、私は三途川の婆の木像を破毀したのを、悪い事をしたとは思はなかつたばかりでなく、却て悪を懲した痛快事と信じて居るのであつた。

『汝は何ちゆう悪九郎ぢやろか。所詮乃公が手には余るけんが、長崎へ返して了はんばならん。汝如たる悪九郎は乃公は見たことが無か。』

伯父は私を前に呼んで斯う云ふのであつた。私は私が何を為れば、伯父の云う様な悪九郎であるのか、何故に長崎へ返されるのであるか解する事が出来なかつた。私を可愛がつては居たが、極めて厳格な人だつたので、私は其所以を問ふ事が出来ないで黙つて居た。

『金二郎、お前はまたえづい事を為ごさつたげな。十王堂の木像を切り御座つたちうが、本当の事かの。』

伯母は色の黒い不器量な女だつたが、慈愛の籠つた優しい眼に、私の顔をしげく見ながら斯う問はれた。

『三途川の婆なら切りました。』

私が斯う答へると、伯母は吃驚して眼を睥つて、さも困つた事を為て呉れたと云つた様な表情をした。

『何故切つたのぢや』と、重味のある伯父の声は私を押附ける様だつた。

『人が死んで行くと、其著服を脱ぐ婆だち、それで、それで、悪い奴ぢやけん切りました。』

私は当然の事を為たのだとは思ひながら、伯父の心を測りかねたので、おづ／＼しながら答へた。

『人が死んで行くと、著服を脱ぐちうのが憎かゝら、それで切つたち云ふとかい。』

『唯。』

伯父は暫時黙つて居た。

『悪い事したとは思ふとらんとか。』

『唯、悪か事為ツ婆で御座いまツするけん、其を切つたち、悪か事したとは思ひまツせん。』

『汝彼木像を切つと、死んで行く人が著服を脱れんごつなツと思ふとつか。』

私は返事が出来なかつたが、暫時してから云つた。

『何様か知りまツせんが、憎かつたから、』

『そいは解つとる。』と、伯父の顔には何時か微笑が浮んで居た。『金二郎、三途川の婆さんが出て来て、汝を連れて行かう云ふたら、汝如何すツ気か。』

『そんな時や斬るばツかりでがんさア』と、私は怯めないで云つた。

『まア可か。今度までは免して遣る。けんが、短刀は誰から許しを得

たとか。』

私はこれには言句も出せないで、首を垂れるなり畳へ両手を突いた。

『誰から許可を得たとか。』

私は返事が出来なかつた。

『此処来え。』

伯父は皺は寄つてゐるが太い巖畳な手を伸して私の手首をむづと攫んで、ずる／＼と膝下へ引寄せた。そして、私の右の掌を開かせて、自分の左の掌の上に置いた。

『ちつと為とれ、汝の此手が悪いとぢや。引込む事はならんぞ。』

私は伯父が如何しやうと云ふのか解らない。それだけ深く不安を感じながら、大きな掌の中の小さな掌を凝乎と視て居た。

纏て伯父の右の手は高く上つた。そして、私の掌へ打下されやうとした。私ははつと思ふと、全身が固くなつて、覚えず息を呑んだ。

『汝が手は砕くツぞ。』と、伯父は先づ斯う云つて、可怖い眼をして私を屹度見た。

『唯、』と云つた私の口は屹度結ばれ、全身に力が籠つて、出して居る掌が心持ふるへた。

ぴちやりと音がした。び／＼と痺を感じた私の掌は伯父の重ねた掌の間にあつた。

『今度悪事を為すと、汝手は本当に砕けツぞ。』と、伯父は斯う云ひさま私の手放すと、其大きな掌を私の頭に置いた。そして、二つ三つ擦りながら、伯母に向つて、『彼方へ連れて行き御座い。そして、お前からも能う云うて聞せるが可か。婆さんの木像は、久留米に序のあ

つ時詔らへといて、納める事に為さうい。』

伯母は私を納戸へ連れて云つて、懇々と素行に就いて訓誡を加へられた。私は唯々として聞いて居るのであつた。

私は此様風の悪戯を為て、伯父や従兄に叱責されたけれども、平生はまことに可愛がられて居たのであつた。

(二)

あつ／＼夏の或朝であつた。私はいつもの通姫方村とほりひまなむらの海円寺の梅隠老師の許へ、漢籍の稽古にと伯父の家を出た。

朝ではあるが太陽の光線は何物をも焼き尽すかと思ふまで熱かつた。私は美術的に細い竹の籤で細工した饅頭笠を被つて、竹皮草履を穿いて居た。背に斜に背負つてゐる書包さへ暑苦しかつた。

私は不図足を止めた。それはわし／＼と呼ぶ蟬の鳴いてるのが耳に入つたからだ。見上ると、私達には二抱もあらうと思はる／＼梅檀の木の幹に、つく／＼法師の羽の様に美しく透通つた羽を有つた大形の蟬が、ぴつたり縋著いて居るのが見えた。私は其を捕へたかつたが、差当つて好い手段が無かつた。木上の下手な私には一層手の下し様が無かつた。

わし／＼わし／＼と、蟬は余念も無く鳴いて居る。いら／＼してる私には、余念も無い蟬の様子が憎くなつた。私は小石を拾つて、蟬へ投著けた。小石は幹に当つて、こつんと音がして跳反つて、蟬は微怯びひともしなかつた。

『乃公を莫迦にしとツかア。』

私は一層気がいら／＼して、小石を拾つて投げ拾つては投げして居た。

『金二郎さんぢや無かの。』と、背後から声を掛けた男があつた。

私は見返ると、久留米に居る私と同姓の富津勝と呼ぶ、磯貝の佐太郎——私の従兄——の二三歳弟分の男であつた。

『姫方へ行きんさツとか。早う行て早う帰つて来んさい。朝鮮の伯父つあんから好か物が送て来たとおどんが持つて来たどぢやから。』

『おどんの御父さまから。』

私は久振に人の口から私の父の事を聞いたので、何とも云へない懐しさに、覚えず勝の傍へ進寄つた。

『さうだの。海円寺の稽古を早う済して、早う帰つて来なさるが可か。』

私は勝と別れて姫方へ急いだ。

私はこれを機会に父の事を話して置かねばならぬ。私の父は筑後の久留米藩士の家の次男に生れたのであつた。父の兄は他へ養子に行き、二人あつた姉も既に他家へ嫁して居た。然るに父の父は父が四歳の時に歿して、父は母と二人になつた。家格は中小姓格と云ふのであつたが、如何した事情であつたか、父が十四歳の時に、母は姉娘の嫁して居る肥前の国田代在酒井村の莊官の磯貝家——後年私が勉学の為に寄食して居た——に引取られる事になつて、父は磯貝の姉から与へられた僅か二歩金一箇を頼にして久留米を去つたのであつた。尤も、廃家にならない様にと、夫婦者の養子をして富津姓を名乗らせてあつた。此富津の長男に生れたのが勝であるのだ。

父は山海万里の道旅を如何にして辿つたのか京都に上つて、当時宮中の侍医だつた小林某の塾僕になつた。そして、夜は町中へ出て、笛を鳴し、按摩上下云々と呼んでは、多少の療治代を得、それにて筆墨

紙などを購ひ、塾生の書を借りて其を謄写しては、自分の勉学の料としたのであつた。斯く苦学する事数年、二十三歳の時には、師の代理として宮中へ伺候する様になつた。それが如何した訳か、事情は分らないが、師の非常な怒に触れて、父は師の為に京都を追れて、故郷の筑後に帰り、久留米へは入らずして、親戚だつた田主丸の傍の倉橋家に寄食する事になつた。尤も、磯貝に寄食して居た父の母は、父が京都に勉学中——父の十七八歳の頃らしい——に磯貝で病死したと云ふ事であつた。

当時の藩主は、今でも久留米領の人に明君様として記憶されて居る英明の君で、今の有馬伯爵の伯父君に当る御人であつた。此明君様なる英主が不幸にも病死されたのである。其お附きの人に岡永嘉右衛門と云ふ人があつた。此人は私の父の幼時の師であつたのである。岡永は非常に明君様の卒去されたのを悲しんで、哀傷の極精神に異状が發つて、全く発狂したと云ふのではなかつたらしいが、所謂氣が変になつたと云ふ程度の狂人になつて、国を去つて何方を当ともない漂泊の人となつたのであつた。

父は倉橋家に居て、此事を聞いたのであつた。一旦の師ではあるけれども、さる病に罹りながら漂泊の人となつた岡永氏を非常に氣の毒に思つたのであつた。それに、自分の今の境遇を思ふと、まことに堪へ難いものがあつた。斯る片田舎に埋れては、何時の日に家を興さうと云ふ望とても無い。一つには師の後を追うて、朝夕の不自由を扶け、二つには自分の前途の修養を為さばやと思著いたのであつた。そこで、倉橋家へ其旨を書遺して、或夜私に其処を去つて放浪の人となつたのであつた。

父は師の後を尋ねて足跡殆んど全国に遍く、放浪十年に及んだけれども、終に師に会ふ事が出来なかつた。岡永氏は数年の後、久留米に近い宮の陣、——南朝の征西將軍の宮の御遺跡——まで歸つて来て、筑後川に入水して空しくなつたと云ふ事である。

父は嘗て京都で苦学した頃、仏書をも耽読したさうで、此放浪十年の間、半以上行脚僧となつて遍歴したのであるさうな。十年の後肥前の長崎に漂ひ行つた時は、二人の弟子が従いて居て、父を先生と呼んで居たさうである。それ等から想ふと、父は其時既に僧形ではなかつたらしい。それは父が三十六七歳、安政何年かの事であつたらうと察せられる。

父の長崎へ行つた時長崎には非常に虎烈^{コレツ}刺病^{シヤク}が流行して居た。當時所謂トンコロインと呼んで、大流行を極めたのであつた。父は宿屋に居て、請ふ人あれば処方を書いて与へて居た。其薬剤が不思議に起死回生の效を奏して、多くは全治するのであつた。神医来れりとの福音が長崎全市に拡がると、門前市を為すほどに、処方を乞ひ来診を乞ふ者共が群を為して、父は食する暇も、安らかに夢を結ぶ間もない繁忙の身となつた。で、或時などは、駕籠の中に人目を避けて、丸山の遊女屋の奥座敷に潜んだ事があつたさうだが、其駕籠の周囲にも人の垣を作り、遊女屋へも菓を乞ふ人が群を為したさうであつた。

悪疫の流行は止んだが、父は長崎の豪商の永見其他の人々に勧めらるゝまゝ、此地に留まつて医を業とする事になつた。京都で医を学んだのはあるが、父の志は他にあつたのであつた。嘉永六年に彼^{ベル}耳理^リが泰平三百年の惰眠の夢を驚かした以来、志あるの士は何れも邦家の為に尽さうと奮起つたのであつた。廃れた家名を興さうと云ふ宿望を

有つた父も、此機逸すべからずと思つたのであるが、懇篤なる勧誘を却け得ないで、終に医を業とするにいたつたけれども、それは当時の父の志ではなかつたのである。

父は長崎では富津^{トミツ}南嶺^{ナンリョウ}と云つて居た——後には漸庵^{ゼンアン}とも云つたのであるが、極めて嚴格な性質で、路を歩めば必ず中央を歩み、街角に到れば、其中央にいたりて初めて道を転ずると云ふ風であつた。六尺近い大入道の、五つ紋の黒地の羽織に大小を挟み、雪駄を穿いて、大道を往来した父の姿は、ゆゝしいものとして私の記憶に残つて居るのである。古くから長崎に住んで、今日七八十歳の高齢を保つて居る人は、本紺屋町に富津南嶺と云ふ医師が居た事を記憶して居られるであらうと思ふ。

父は医に隠れては居たが、志は勤皇に在つたのである。長崎に来て居た諸藩勤皇の士とは、大概交つて居た。けれども、外国人とも交際して居たから、攘夷家と云ふ側ではなかつた様に察せられる。

斯う云う事があつたさうである。それは外国と通商条約を締結ぶ事に就いて、京都と江戸とに確執があつて、輿論が沸騰した頃の事らしい。予て父と交際のあつた彼有名なフルベツキ氏が、一日訪ねて来て斯う云ふ事を云つた。

『京都の禁廷様好うあいまつせん。江戸大君さまよろしいあります。禁廷様と大君様取替るよろしい。』

『何を云ふかお前は。』と、父は大の眼を睜つて叱つた。『国体を知らんとは云ふものの、勿体ないとも、恐れ多いとも……其方如き者とは、以来交らん。早う去れ、直ぐ去れツ。』

父は薬局生に命じて、フルベツキ氏を追出して了つたさうだ。以来

同氏とは絶交して、明治七年か八年かに私の家が東京の中六番町に在った時、突然同氏が訪ねて来て、父が留守だったので、母が逢つて久澗を叙した事を、私は覚えて居る。其時のフルベツキ氏の日本語は、発音と云ひ語調と云ひ外国人とは思へないほどであつた。

彼の東京の築地に立教大学校を起したウイリヤムス氏も当時長崎に来て居たさうだ。まだ三十歳にもならない云はゞ青年で、日本語はフルベツキ氏ほど巧妙でなかつたが、其頃既に太閤記などは読み得て——後年には白文の漢籍を読んで居た事を私は知つて居る——太閤秀吉公は如何の、徳川家康公は如何のと批評して居たさうだ。私の兄が生れた時に和歌を詠じ、兄を『新し富津』と呼び、私が生れると、兄の名の正之尉に新しの形容詞を附けて『新し正之尉』と呼んだと母の話に聞いた事がある。

父は斯うして心ならずも医を業としてゐる中に、戊辰の革命が成就されて、世は明治となつたのであつた。

(三)

私が勉学の為に、酒井村の伯父の許に送られたのは、九ツの年明治二年の事であつた。其時までは、父は長崎の家に居たのであるが、翌三年には朝鮮へ渡航して居たのであつた。伯父は一日父の事に就いて斯う云つた。

『金二郎、お前のお父さんは朝鮮へ行き御座ツたぞ。』

朝鮮と云ふ国の名は、秀吉の朝鮮征伐と云ふ事から、私には此時始めて聞く名ではなかつた。で、直ぐに征伐と云ふ事に聯想おぼろんだ。

『征伐にぢやろか。』と、私はそゝられる様な心地で問うた。

『いんにやア、征伐にぢやアない。談判に行き御座ツたげな、天朝の

御役人にないござつて。』

そして、天朝の御役人と云ふのは、天子様に従いて居る臣下と云ふ事、父の談判を朝鮮国で聞入れなければ、日本から征伐に出掛ける事になるかも知れぬと云ふ事などを、伯父が話して呉れた。

『ほう。』

私は斯う云つて眉を揚げた。父が天子様の臣下だと云ふ事と、父がさう云ふ大事を引受けて居ると云ふ事と、ひよつとすると朝鮮征伐が始まるかも知れないと云ふ事などの、十歳の私には可なり複雑した感想が、ほうの一語となつて発したのであつた。

其朝鮮に行つて居る父から何か送り越した其物を、勝が久留米から持つて来たのだと云ふではないか。私は姫方へなぞ行く気にはなれなかつたけれども、厳格な伯父、伯父以上厳峻だった従兄の佐太郎の叱責が怖しかつたので、詮方が無しに勝に別れて姫方へ急いだ。急いだもく、一里近い路を私は駆通したのであつた。早く海円寺へ著いて、早く稽古を済して、早く伯父の家へ帰りたいかつたからだ。

老師梅陰上人は私が汗みづくになつて息を喘ためしてるのを見て、途中で何事か発おこつたのではないかと心配されたのか、雪の様に白い眉を顰めながら仔細を問はれた。私は有の儘を話した。そして云つた。

『今日は、早う帰りたう御座りまツすツから。』

上人は莞爾として首肯された。そして、二時間ばかり過つと、平日は午後でなければ許されないのに、今日は午前の中に帰宅を許された。のみならず、上人は巻紙に何か認めて私へ渡された。

『帰つたら、伯父つあんへでも、佐太郎さんへでも可かゝら、それを見せ御座い。』

私は寺の門を出ると駆出したが、如何したのか右の脚が痛い。ひどくはない、また断えず痛むのでは無いが痛い。それでも私は、走こしなかつたが、普通よりは疾く歩いて酒井村へ帰つた。

『金二郎さん、御帰んさつたかの。』

勝は尻からげになつて家の入口へ立つて居たが、私を見ると斯う云つた。

『何処へ行きこざるの。』

私が斯う問うた時、佐太郎は投網を提げて土間の奥から出て来た。

そして、私を見ると口早に云つた。

『足下も後から来ツか可か。』

『何処へ行ツとんなさツとる。』

『川で鮎捕ツとぢやから、後から来ツが可か。村上の方へ投つて行くけんが、其意で来ツとぢや。』

佐太郎と勝とは駆出して行つた。私は家へ入つて、伯父の前へ行つて辞儀をして、老師から託された手紙を渡した。伯父は手紙を読むとこくししながら、

『海円寺さんが御早う返して遣つたで、御叱なさん様にと、手紙を附け御座ツた。今日は早う帰つても可かつた、朝鮮から好か物が届いとる。』

伯母は私の父から贈られたのだと云つて、十数箇の乾鰯と鰯三束、それに木箱の白い粉の中に埋つた朝鮮鮎を取出した。そして、鮎を粉の中から引出して、縫糸で一吋角ばかりの大きに断つたのを、三箇紙に載せて私の前に置かれた。

『一時に余計食べツと、腹によくなくなゝら、今は三箇だけにして置く

が可かたい。』

私は黙つて鮎を食べた。非常に美味と思つた。

『鰯と鰯は後刻で遣いから、楽みにして居るが可か。』

伯母は笑ひながら云つて、其処に合せた佐太郎の嫁のお光に、盆に載せたまゝ三種とも彼方へ運ばせた。

『金二郎、佐太郎と勝が川狩に行とツから、汝も行て見ツが可か。』と、伯父が云つた。

私は家外へ出た。脚の痛は姫方からの帰途に痛んだのよりも強くなつて居た。それでも私は川へ行つて見た。村を村上から出端れるまで、川に二人の姿は見えなかつた。私は脚の痛が漸次酷くなるので、其処から引返さうかと思つた。途端に、勝が川柳の繁つた蔭から声を掛け

た。

『もちツと川上から降りられツから、降りて来んさい。』

『おどんは脚が痛かゝら帰る。』

『脚の何処が痛かとか。此処来て、水ん中へ足突込むと、大概痛かとは治るたい。早来ツが可か。』

と、佐太郎が云つた。

私は詮方が無いので、少し川上へ行くと、土手の崩込んで降り好さうな処があつたから、非常に辛い思をしながら其処から下りた。

『佐太郎さん見んさい、本当に痛かごたる。』

勝が斯う云ふと、佐太郎は凝乎と私の方を見て居た。

私は脚を水に浸すと、ちよいとは好い心地だツた。水底の砂を踏むと、薄濁がして直ぐに澄返つて、白く美しく見える自分の足の甲を見ながら二人の傍に近歩つた。

『やつばい足が痛とか。暫時したら直ツく。足下は之を持つて尾いて来ツが可か。』

佐太郎は私へ魚籃を渡した。私は中を覗いて見た。三寸足らずの鮎が十尾ばかり入つて居た。平生なら私は何様に喜んだか知れないのに、今は余計な物でも見る様な気がした。私は此時既に何とも云へない可厭な心地がして居た。そして、脚の痛みも堪へられないほど酷くなつた。流水の中で、一歩抜くさへ非常な努力をしなければならなくなつた。私は立縮たちぢくくんで泣出しさうになつた。

『何故一緒に来るときやア。』と、佐太郎は遙かに後れた私を見返つて怒鳴つた。

私は返事を為なかつた。眼の心が痛んで、頭がぐらぐらする様に覺えた。

『何様しんさツたか。脚が痛かゝの。』

勝は浅瀬を飛んで私の傍へ来て問うた。

『脚が痛か、気分も悪るか。』と、私はべそをかきながら云つた。

勝は私の額へ手を当て見た。

『ひどい熱たい。これでは気分も悪かはず。』と、勝は私へ斯う云つて、佐太郎へ声を掛けた。『熱が酷か、まるで焼ける如たる。』

佐太郎も急いで戻つて来て、私の額へ手を当ると、血走つた眼を睜つて、唯『ほう！』と云つた。

『歩ばれんの。』と、勝が云つた。

私は實際足を動かす事さへ出来なくなつて居た。で、私は頭を振つた。

『負うて遣りたい。さア。』と云つて、勝は私へ背を向けた。

私は手から魚籃を放すと、水に落ちて浮いて流れながら、危なく沈まうとしたのを、佐太郎が手早く取上げた。

『莫迦が、些との熱に。』

私は佐太郎の血走つた眼を避けながら、勝の肩へ両手を掛けた。勝は私を揺上げながら立上つた。

『あいたア』と、私は声を曳きながら泣出した。右の痛む足が折れもしたかと痛むからであつた。

『何を泣くとかア、女子の如つ。』と、佐太郎はまた叱つた。

『よかく、そろく負うて行こたい。』

心の柔い勝は斯う云ひながら土手へ上つて、私を連れて帰つて呉れた。そして、勝はまた川狩へ出て行つた。

伯父伯母の吃驚は気の毒な程だつた。私は表庭に向いた静かな四畳半に、病蓐の人となつたのであつた。

驗温器などは未だ無かつたから、熱が何度あつたか分らないが、私は火の中に臥おてる様な気がして夢中だつた。脚の痛むことも非常であつた。右の脚の附根が脈を打つ様子にづきんく痛む。病蓐の傍を人が私と歩んでも、私は泣声を上げて痛苦を訴へるのであつた。

玄益と云ふ村に唯一人の医師が私を診察した。診断は虫の為だと云ふ事であつた。村に唯一人の医者おの診断である、素人たる伯父も伯母も其を信じない訳には行かなかつた。其虫を瀉おさせて了はうと云ふのであらう、私は下剤の為に幾回となく虎子おこにかゝらなければならなかつた。神医の神剤が效を奏したのもあらう、私は非常に衰弱すると共に、火の如き熱も退去り、間断なく痛んで居た脚の悩も癒て除去された。私が病蓐から離るる事になつたのは、一月余後の事であつたが、

私の右の脚は不具同様になつて、歩むどころか立つことさへ出来ないで、左の脚を頼にして僅かに這い回り得るのみであつた。両手に確と障子に縋り、右の脚を浮せて、左の脚で立ち得る様になつたのは、既に涼風立ツて、衰弱してゐる私の体には恰が欲しくなつた頃であつた。

小鳥や猟犬の様に村中を駆廻つて居た私が、家の内さへも僅かに這廻るだけで、それ以上の自由を得ないとなつては、其苦痛は比べるものもないほどであつた。顔色は云ふ迄も無く蒼く寝れて居る、快潤な子供らしさは無くなつて行く、伯父夫婦には之がどれほど大なる心痛であつたか、伯父は私を見ては大息を吐かれるのであつた。

『十王堂の婆さんの御像も納めたで、其祟もゝう止むで御座りまつせうから、金二郎の病氣も、此の秋の内には治りまつせう。』

伯母は斯う云て伯父を慰められた事もあつた。

女の事であるから、伯母は私の今度の病氣を、三途川の奪衣婆の祟と信じて居られたらしい。で、私がまだ病聲に横はつて居た頃に、態々久留米へ人を派つて、仏師に命じて其木像を刻ませて、十王堂へ納められたのであつた。迷信とは云ふものの、伯父と伯母がやんちゃの甥の為に心を苦しめられたのを、私は深く謝さなければならぬのである。

秋の末になつて、突如久留米の富津から吉報が来た。それは、長崎の私の母が昨夜到着して、明日は其地を訪はるゝ筈であると云ふのであつた。

『御母様が明日は御入来なさる。』

私は何様に嬉しかつたらう。不自由な体でなかつたら、其日直ぐに二里の路を久留米へ飛んで行つたかも知れなかつた。

『明日は御母しやまに逢はれる。』

其夜私は長く眠られなかつた。

(四)

『長崎の金二郎の母さんが来御座るげな。碌な食物も無かけんが……氣は心ぢやけん、まう何なツと製へまつせうばい。』

伯母は姨である私の母を迎へる為に、お光や下婢を指図して、朝から立働いて居られた。

佐太郎は朝早く叔母の案内者たるべく久留米へ行つた。伝八は赤川へ、作蔵と呼ぶ小作の男は水屋へと別れて、見張の為に行つた。

私は隣家の卯一と云ふ若い農夫の背に負はれて、村下の路に行つて見たり、水谷川の土手の上に立つたりしたのであつた。

けれども、母は何時までも来なかつた。

『おどんは卯一に負はれて、久留米まで行て見たか。』

私は余りの待遠さに、斯う伯母へ請うた。

『さう云ひござるのも無理は無かけんど、もう来ござらうから、暫時辛棒して居御座い。そいにお前は病氣ぢやけん。御母さんも早うお前に逢ひたかとぢやから、今日は屹度来ござつさ。』

伯母は斯う云つて呉れたけれども、母は午時を過ぎて来なかつた。私は泣きたくなつた。私はとうくしくく泣出したのであつた。

『久しか振に逢ふ御母さんに、泣泣顔見せツとか。』

伯父は斯う云つて叱つた。私は泣くことさへ出来ないのだ。前に病氣の時臥て居た四畳半に入つて、私は未だ赤くは熟れない橘の実を見ながら、母の事を思つて居た。

『金二郎さんは何処かの。御母さんが来ござるげな。』

お光が私を探しに来て斯う云った。私は覺えず立たうとした、立つて駆出す意だつたが、ばつたり俯伏に倒れた。

『私に負はれござるが可か。』

お光が向けた脊に私は負はれた。上框には伝八が腰を卸して居た。伯父も伯母も其処で伝八の報告を聞いて居られた。伝八は赤川で私の母を迎へ、佐太郎の命を受けて其報告に來たのであつた。

『金二郎さま、私が負うて上げまツしよ。』

私はお光の脊から伝八の脊に移つた。

『御母さまが來御座るで、嬉しい御座りまツしよなア。』と、伝八は門を出ると云つた。

『うむ、嬉しいか。何方から來ござツとけ。』

『赤川路から來御座りますたい。』

伝八は門を出ると、路を左へ取つた。未だ二十間とは行かないのに、もう其処に母が見えた。佐太郎が母と列んで案内して居る、母の後は五歳ばかりの色の白い眼の大きい切かぶり女の子が、四十ばかりの女に負はれて居た。

私は母を見ても何とも云へなかつた。何だか羞かしい氣がして居た。

『おゝ金二郎かの。』

母は唯斯う云つたばかりで、凝乎と私を見た眼の中は、看々潤んで來た。

『おのぶ、中の兄しやまばの。』

母は後の女の子を見返つて云つた。女の子の大きな眼は私を見た。そして、直ぐに伏目になつた。見違へる様に大きくなつた妹、美しく

なつた妹に比べて、老いたる農夫の背に瘦せ衰へて居る自分が羞かしかつた。

『叔母さま、彼方に見える門がさうで御座りまする。』

『おゝ。』と云つて、母は茅葺の大きな門を見た。そして、伝八を見返つて、『度々御苦労の。』

『なアい。』

伝八が突如に頭を低く下げたので、私は危く其禿た頭を越えて滑落ちやうとした。

(五)

私は翌日母に伴はれて久留米へ移つた。これは朝鮮へ行つて居る父からの指図で、母も長崎を引払つて久留米に住むことになつたのであつた。

母は長崎の町家の出生である。母の生家は維新前までは、商人方とか云ふ格があつて、和蘭陀や支那の商船が入港すると、其輸入した貿易品を、例へば奥縞(唐棧の事)なら奥縞一反を、商人方へ納める仕來で、何品に限らず其通であつたさうで、私が覺えても乏しくなく生活して居たのであつた。

武士と町人と云へば、其権力に非常な相違のあつたものである。町人は常に武士に侮蔑を受けて居た。母は武士から卑められた町家の出生である。父の縁類故旧は殆んど総が武家である。母は其父の故郷へ移住む事になつたので、非常の決心をもつて長崎を出たと云ふ事である。

父がまだ医を業として、長崎の本紺屋町に住んで居た時代には、塾生が十二三人あつて、藥劑を調合する者は七八人を下らず、藥取の男

女は内土間に黒々と見えて居た。私が長崎を出る頃もさうであつた。母も三四人の女婢に侍^{かしこ}かれて居たのが、久留米へ来た時は、私の兄に弟、それに妹の三人の子供の唯それぎりであつた。久留米の田町の商人で、和泉屋源助と云ふ長崎で父の愛顧を受けた男が、供をして来ただけであつた。母の身になったら随分淋しい事であつたらうと察せられる。

母は先紺屋町の富津方に落着いたのであつた。此富津は勝の父で、名を善蔵と云つた。善蔵と云ふ名は私の家にとつては大切な名である。中興の祖藍溪先生が富津善蔵弘恒^{ひろつね}と云ひ、其次が二代の善蔵弘郷^{ひろさと}と云つた。其善蔵と云ふ名を勝の父が継いで居るのであつた。其家も私の祖母が父の幼時に住んで居た家である。母は斯る由緒のある紺屋町の富津家へ落着いたのであつた。

其時は未だ諸大名の藩籍奉還以前で、藩主は知事の名を以て尚ほ実権を握つて居たのであつた。で、私の父は朝廷の官吏となつて居ると共に、既に久留米藩に以前の中小姓格を以つて召返されて居たので、朝廷の官吏でありながら藩主有馬家の臣と云ふ変な身分になつて居るのであつた。で、藩主から富津弘信^{ひろのぶ}——父は此時斯う名乗つて居た——の家族を住ませる為に、城内に邸を賜つたのであつた。其邸に入らないのも礼であるまいと云ふので、母は私達を伴つて其処へ移り住んだ。けれども、女や子供ばかりで住んで居られる処ではなかつた。そこで、其邸の返納を願つて、和泉屋源助の周旋で、田町の綿屋の隠居所を賃借して住む事になつた。隠居所であるから広くはない、三間ばかりの小奇麗な住居で、庭も庭らしい庭で、梅もあれば槭柏^{もみぢ}もあり、庭の端には可なり広い蓮池があつた。池を越して調練場が見えた。尤

も、此時は此所に練兵すべき兵士が養はれて居るのではなかつた。調練場と云ふは名ばかりで、私は兵士らしい影さへ其所に見出した事はなかつた。けれども、青毛氈を敷いた様な間に、田町から米屋町への捷徑^{ちやうみち}が一筋赤く色をかへて、人の往来してゐるのを見るのが、家の内を這回つてゐる私には、此上ない慰藉^{なぐさみ}であつたのである。

十一歳の兄や八歳の弟は田町に移ると間もなく、城内にあつた藩養明善堂へ、毎朝漢籍を学びに行く事になつた。私はそれが羨しかつたが、不具に近い身では如何する事も出来なかつた。

『其様思はんでも可かたい。滋養^{くすり}になる物を沢山食べさせて、早う全快して遣るからの、些^ちとも心配する事は無かばの。』

母は斯う云つて私を慰めて呉れた。母に取つては、私は不具に近い体になつて居るのが、何ものよりも心苦しかつたのであつた。父からの手紙には、何時でも私の病に就いてかにかくと書いてあつた。此頃の父にも母にも、私の此病と云ふものが堪へ難い苦痛であつたらしい。

母は私の為に毎日鶏一羽をつぶさせて、其から採つたソップを私に飲せるのであつた。そればかりではない、營養の效のある物とさへ云へば、如何に高価であらうと必ず調へて与られた。母の丹精は終に效を奏して、さしもの難病に打勝ち得たのであつた。私は翌年の春は杖などの力を借りないで、人並に歩行し得る様になつた。私の喜よりは、母の喜の方が何程深かつたか知れない。

『これでお父さまに申訳が出来たゝい。これから學問に精出して、偉^{すく}れた人になるのが、お父さまや私に孝行になるとばの。』と云つて、母は喜んだ。

私は本当に勉強しなければならぬ、母の此高恩に報いなければなら
ないと思つたのであつた。

兄や弟が羨しかつた私も、明善堂へ通学する事が出来る様になつた。明善堂の講堂は随分広いものだつたと記憶して居る。百畳敷ぐらゐであつたらうか、それ以上であつたらうか、まだ十一歳だつた私には其様見積が出来る筈が無いが、兎に角広いものであつた。其片側に低い木机が長く長く續けて置いてあつた。其机に一間隔きぐらゐに幾人もく先生達が著座すると、学徒等は自分の好める先生の前に行って、素読を学ぶのである。それも我勝にと争つては混雑する恐があるので、学徒等は自分の姓名を書いてある木札を先生の机の上に置く、おかれて来た者の木札が上に上にと重なるのである。先生は著座すると其木札を、一攫に攫んで逆に置替へるので、第一著の学徒の木札が上に見れる事になるのだ。又先生の見込で、学徒の能力に従つて、一回に教へらるべき行数を其姓名の上を書いた厚紙の札が渡してある、学徒は書物を開くと共に其札を先生に示す、先生は其札に書かれた行数だけを其学徒に教へると云ふ事になつて居るのであつた。

私達は朝は四時頃には臥床を出る事になつて居た。そして、兄弟三人漢籍を声を挙げて読まなければならない。それが済むと明善堂へ行くのであつた。明善堂では定つた行数を学ぶだけで、直ぐ家へ歸つて来て復習する。午後には、他の先生の家へ漢籍を学びに行くのであつた。それも二箇所三箇所と行つた。母は私達兄弟になるべく早く学問を上達させて、父の依託に背くまいと苦心して居たのであつた。

母は父の親戚や故旧には、久留米に来てから始めて逢つたくらゐで、而も自分が町家出と云ふ卑下の心があるから、人々から何様な待

遇を受けるであらうか、此事を非常に苦勞に思つて居たらしいが、私の父を親く知つて居るほどの人は、だれもく母を侮蔑するどころでなく、母が万事に控目で、何人にも親切なのを見ては却つて尊敬したのであつた。私達の従兄弟従姉妹たちは——父の兄の娘には母と同年のさへ居たのである——叔母さまくと慕つては集つて来た。母は此等の一人からでも蔭口を云はれないほど能く勉めて居たのであつた。それでも母には絶えず苦勞が附いて廻つて居た。

それは、私達兄弟が明善堂の学徒からは勿論であるが、町の子等からまで、動もすれば他国人扱される事と、金銭問題とに就てゐた様に思はれる。

父が天朝の役人——其頃の人は斯う云つた——であるのと、父が長崎の流行医であつたと聞伝へて居る人々は、母が定めて有福であらうと思つて居たのである。けれども、母の手では、月費幾許と父が予算を立てゝ置いた以外の金銭は自由にならなかつた。其月費さへも、嚴格な父が確實な人と見立てた藩士の浅野節三郎と云ふ人の手から、月々母の手へ渡されるので、幾百円であるか幾千円であるか其額は知らないが、私の家の金銭は浅野に保管されて居るのであつた。親戚の人々は何れも此事情を知つて居たのである。それでありながら、母の許へ金談を持込む者があつた。

『私の手許にあつたなら、何とでも致しませうが、浅野さんへ御相談致さない中は、如何とも御返事が出来ませう。』

母は何時でも斯う答へる外はなかつた。

『浅野へ相談しんさんでも、五両や十両の事ぢやもん、お前さまのお考一つで如何でも出来ませうがの。』

相手は斯う云つて母の顔色を窺ふのであつた。其頃の五両十両と云ふ金は其様に容易く口で云へるものではなかつた。十両の金があれば或は母子五人が一月を支へ得るほど尊いものであつたかも知れないのである。

で、此様な談を断つて置いて、二歩か三步の事ならばと、母は月費の内を苦しい思をして他の人へ用立てる事でもあれば、前の人は母を怒つて、ありもせぬ事を云触らしたりするのであつた。

『同じ親類を同じ扱ひにせんとは何事か。乃公には十両の断云うた口で、〇〇へは笑うて十五両貸しござつたげな。町家出ぢやで為様もなかゞ、親類の交際ちうもん知らんといふ。』

此様事が直ぐ母の耳に入るのである。

『私の自由になるとならぬ。』

母は何も知らない私達へ突如に此様事を云つて深く太息を吐く事さへあつた。

聞くにも勝えない蔭口を聞いた時など、母は眼を潤ませて居る事もあつた。そして、夜になつて兄か私を伴つて浅野を訪ねて、思余つた苦衷を訴へて、来月の月費の前渡を乞はるゝ事もあつた。

『如何して其様費んなさつとぢやろか。私は預つとツとぢやから、入用と云ひなさるなら御渡しても可かけんが、弘信さんへ如何云うて上げた可からうの。』

堅固一方の浅野は斯う云ふ。それでもとは云ひかねて、空しく帰去ることもある。強て請うて受取つて帰る事もあつた。そして、それは母や私達の為でなく費されるのであつた。

斯様事で急に來なくなる親類があるかと思ふと、それがまた來始め

るツかと思ふと、もう何事かを云触すと云ふ風で、母は暫時も心の休まる時と云ふものはなかつた。

(六)

夏の事であつた。私達は祭を見るために、城下を少し離れて、筑後川に沿うた小森野の方へ行つた事があつた。兄に私に弟と、五歳になる妹は召使の婆の背に負はれて行つた。男兄弟三人は木綿の飛白か何かの単衣を着て居たが、妹は長崎でも晴著にした縮緬に大きな模様のある単衣を着て居た。それが酷く眼に立つたのであつた。婆はそれがまた自慢で、揉みくちやの渋紙見たいな顔を応揚に扱ひながら、群集の中を押分けては通り通りした。

前に云つた明君さまの御主意とやらで、久留米領では身に絹布を纏うたり、頭に金銀鼈甲などの飾をしたりする事を禁じてあつた。その為、土農工商いづれも富んで居ると云ふ事であつた。その禁令も維新まで、私達が居た頃は、町人は素より土家でも、祭の時などは、女は絹物を著たり、金銀の飾を為たりするのであつた。けれども母は父から禁令の事を聞いて居たのと、成たけ眼立ない様にとの心掛から、儀式の時の模様ものさへ、態々木綿物で新調したりした。髪には何の飾もしなかつた。由来長崎は衣服髪飾に贅沢な土地であつたから、母も妹も相応に其等の物を貯へて居たけれども、妹にさへ絹物は著せないであつた。それが今日に限つて、婆が妹可愛さから強請んだとは云ふものゝ、母もつい著せて遣る氣になつたのであつた。婆は母の許が出たので大喜びで、彼か此かと撰出して、友仙染の大模様の縮緬の単衣に、燃るばかりの緋鹿子の帯をふツさりと結び垂げ、大自慢で出掛けたのであつた。

野には夕靄が籠めて来たので、私達は群集と交りながら帰路に就いた。路幅は一間あるなしかつた。一方は稲田で、一方は溝である。溝には水は中央に僅かあつただけだつたけれども、深さも広さも一間上であつた様に覺えて居る。私達は群集に押れながら、其溝の縁を歩んで居た。

『しぶてい人ない。』

斯う云つた声が聞えた。其頃の久留米の青年は路行く同年輩の者なぞを悪いと思ふと、直きに『しぶてい人ない』と云つたものだ。生意氣な奴だと云ふのと同じ意味なのである。

『しぶてい人ない。』

また斯う云つたのが聞えたので、私も兄も其方を見返つた。すると、私達を大きな眼で睨んでる十五六歳の男があつた。それは河原虎太郎と云つて、庄島に住んで居る格の低い侍の息子で、有名な乱暴者である。私達は明善堂で河原を知つて居た。知つて居るとは云ふものゝ、互に顔を見知つて居ると云ふだけであつた。河原に列んで同年輩の男が二人居た。

『しぶてい人ない。』

河原はまた斯う云つたが、漸次に私達の方へ近寄るのであつた。

私も眼が大きかつたが、兄のは私よりも亦大きかつた。けれども、兄は色の白い美少年で内気だつた。私は色の黒い気高者だつた。で、私は河原が『しぶてい人ない』と云ふ声を聞くと、其都度睨返す様な眼付をして河原を見た。

『よそみをせんと、早う歩くが可か。』

兄は斯う云つて私へ注意した。

河原は何時か私と聯んで歩んで居た。

兄と弟が先に立つて、妹を背負うた婆が続き、私は最後に歩いて居た。

『お前はえらかない。』と、河原は私へ云つた。

『何が。』と、私は河原を見た。

『えらかさ。明善堂で十五行習うとツじやろ。此河原は半行ちうとに。』

それは事実であつた。私の年輩で十五行と云ふのは、類がなかつた。兄でさへ九行から後に十二行になつたのであつた。河原の半行と云ふのも余り類が無かつた。而も、彼は私達よりも三つ四つの年長者だつたのである。けれども、色の白い輪廓の正しい顔で、凜とした大きい眼、鼻筋の通つた高い鼻、身毛は十六七にも見える、実に堂々たる風采の少年であつた。

『どきやんすれば、一時に十五行も覚えツときや。』

『知らん。』と、私は答へた。

『我事を我が知らんちうがあツかい。』

『それでも知らん。』

『しぶてい人ない。』

私は河原の堅く握つた拳の動かうくとするのを認めた。『おれを打つとか。唯は打たれんぞ。』私の胸には斯う呟いた。

『太鼓が来た。』

斯う云ふ声が聞えた。みんなが見返つた。神輿に従いて歩きながら太鼓が、太鼓ばかりで来たのであつた。太鼓は二人の太の男に担はれ、撥を持つた男が其に引添うて居た。けれども、太鼓は鳴らされないで、

群集を押分けながら近寄った。

『何すつきやア、無礼者が。』

河原に太鼓の人か太鼓が触れたのであらう、彼は身を退きさま両腕に力を籠めて、太鼓の後を担つてゐる男を突いた。其男は私へ倒れ掛らうとしたので、私は素早く体を避けると、撥持つ男へ倒れ掛つた。撥持つ男はうんと支へながらよろめいた拍子に、背を婆の肩へ撞当てた。溝の縁を歩いて居た婆は一溜ひたひたもなく、妹を背負うたまゝ横さまに溝へ陥つた。

『やア婆さんが落ちた。』

『子供が一緒ぢや。』

群集は騒立つた。私達兄弟三人は唯うろ／＼するのみであつた。堀は深し、飛下るにも一寸たよりが悪いのであつた。けれども、僥倖にも堀の縁の方には水がなかつた。幸ひに深うはなかつたので、ぬかる泥の中に婆は辛やと起上つた。そして声を出して泣いてゐる妹を懷だきあ上げた。妹の白い顔の半面は黒い泥砂に汚れて居た。衣服は云ふまでもなく、二人とも泥塗になつて了つて居た。

『早う／＼。』

兄は斯う励まして、婆が差上げた妹を抱取つて地上に立せた。弟が妹を保護してゐる間に、兄と私とは婆の腕や背の衣服を攫んで力を添へて、辛うじて婆を這上らせた。

『奥さまに申訳が御座りますツせん。』

婆は唯そればかりを云ふのであつた。

妹の周囲には隙間もなく人が集つて居る。衣服を評したり、其汚れたのを惜しんだりする語は聞えるけれども、妹をいたはる声としては一

も無つた。

『こげん美よか衣服著とらすから、罰が当たつたとくさい。』

斯う云つた者のあつた時には、私は其女に武者振りつきたい程口惜しかつた。女は兎に角として、男も多く交つて居ながら、婆と妹を扶けて引上げて呉れやうとしたものさへなかつた。これも私達を他郷の者と見て居るからであらう、妹の美しい衣服を着て居るのが嫉ましくも憎くもあるからであらう。私は此様無情な人間達から、憐んで貰はうとも、扶を求め様とも思はない。けれども、其時は何に比たへ様も無く口惜しかつた。

『……罰が当たつたとくさい。』と冷笑みづつた女に、年は老とつて居ても氣嵩の婆が何か云はうとしたのを、温順な兄は眼で押へて云はせなかつた。

『精三郎、お前は早う宅へ歸つて、御母さまへ此事を申上げツが為よか。』

弟が駈出さうとするのを私は止めた。

『精三郎よりか兄さんが行きなさツか可か。おのぶと婆には、私と精三郎が附いて行く。』

兄は直ぐ我家へ歸つて行つた。婆は妹の顔を拭いて遣つて、また背負うた。私と精三郎は婆の左右に立つて急いだ。

櫛原と云ふ邸町を通つて、三本松を左にして過ぎて、米屋町と庄島の方へ向いて歩いた。庄島と米屋町の境の溝川を渡つて右へ折れると、私の家から坐つて見える調練場へ出る。無論私の家も見えるのである。

婆は溝川に架つた橋を渡ると歩を止めた。

『風呂に入つて、御嬢さまを御奇麗にして参りますから、お嬢さまの御著替を下さりますツせう。』

『何処ん風呂に入ツとか。』と私は問うた。

婆が指すのを見ると、其処に風呂屋の軒が見えた。

『精三郎、此処の風呂屋に居ツことを、帰つて御母さまに告げツが可か。おいはおのぶの衣服を持つて後から行くから。』

精三郎は調練場の方へ駆けて行つた。私は婆と一緒に風呂屋へ入つて、妹に著物を脱がせると、私は其著物を一抱にして我家へ飛んで帰つた。田町の入口にて、兄と弟が著物の風呂敷包を持つて来るのに出会つた。三人は顔を見合せたのみで馳違つた。

私は宅に帰つた。母は座敷の縁に立つて調練場の方を見て居たが、私の足音を聞いて見返つた。私は母の顔を見ると急に悲しくなつた。

『おのぶも溝へ落ちて……。』

私はこれだけ云ふと、後が云へないほど悲しくなつて泣出した。

『泣かんと可か。怪我はせんぢやつたち云から。』

『怪我はせんばつてん……。』

私はやはり泣きながら云つた。

『正之丞もお前も何故其様泣くとぢやろ。男はさう脆く泣くもんぢやなかばの。精三郎は泣きもせねば、はつきりと物を云ふたのに、平生のお前の様にもなか、もう泣きなさんな。』

母は斯う云つたが、其眼は潤んで居た。

妹は美しくなつて、二人の兄に連れられて帰つて来た。母は見ると直ぐに妹を抱上げて、凝乎と其顔を見て居た。私達三人もやつと平生の心持に帰つたのであつた。

婆は夜になつて帰つて来た。それも、紺屋町の富津の勝の母に連れられて、其人の口から詫びて貰ふ為であつた、婆の過失と云ふのではなく、時の災難である。母は其後も此婆を目を掛けて使つて遣つたのであつた。

(七)

河原虎太郎は小森野の祭礼の帰途以来、兎角私に喧嘩仕掛の挙動を見せるのであつた。明善堂の稽古帰には、屹度私を待受けて居る。そして、私が返辭に困る様な事を云ひ掛けては、例の『しぶてい人ない』と浴せ掛けるのであつた。温順な兄は私の為に非常に心配して居た。虎太郎は有名な乱暴者である。十六七にも見える大柄の、私なぞは一拳に打拉がれさうだ。兄は弟が怪我でもさせられてはと心配したのであつた。私もさう思つて居た、喧嘩したら負ける、頭に瘤も出来よう、頬から血も流れようと覚悟して居た。恐れてる様な顔はしなかつたけれども、実は恐しかつたのだ。私は何を云はれても口を噤んで居た。

生憎なもので、虎太郎は庄島へ帰るので、私の家は其庄島の下の田町に在るのだ。明善堂を出てから家に帰るまで、如何しても虎太郎と一緒ににならない訳には行かないのである。虎太郎に逢ふまいとすれば、明善堂の通学を廃する外道が無いのである。虎太郎が可怖いからと云つて、学問を廃する——明善堂の通学を廃するのが、全然学問を廃すると云ふ訳にはならないけれ共——其様事が出来様筈が無い。藩主の設けて置かれる藩塾に通つて居らぬと云ふのは、藩士の子として恥辱でもあるのだ。況て河原虎太郎と云ふが可怖いからと云てそんな満らない事が出来べきでないではないか。

『河原が打つたら、お前は如何すツか。』

『唯は打たれとらん。』

『抵抗つたら怪我しござらう。』

『すツかも知らんけど、詮方が無か。』

兄と私の間には此様事が云ひかはされた事もあつた。

或日の日が暮れて間もない時であつた、母は下女と向合つて、茶の間で糸車を廻し、木綿の糸を紡いで居た。ぶうん／＼と二人の糸を紡く音が一つになつて聞えたり、二つ別々になつて聞えたりして居た。弟と妹は既う寝て居たが、兄と私とは座敷で書物を読んで居た。

『御免な下さりませ、富津さまは此方様で御座りまツしうか。』

聞馴れない男の声で、直ぐ上口から問ふのであつた。

『富津は此方で御座ります。』と、母が答へて糸車を離れた。

兄と私は顔を見合せながら座敷から聞いて居た。

『私は河原虎太郎の親で御座りますが、虎太郎のことで御託にまゐりました。』

私は虎太郎と聞いてぎよつとしたが、託に來たと聞いて不思議でならなかつた。

『虎太郎、お前が出るが可か。』と、其父が云つた。

『虎太郎も來とる。』

私が斯う呟くと、兄は眼で首肯いて耳を澄して居た。

『昨夜浅野節三郎様から御使が御座りましてな、何事かと心得て伺ひますと、悴の虎太郎が、何か此方様の御子に無礼な事ばかり致しまするげな、浅野さまが酷う御立腹なされまして、彼富津を何と思つて無礼すツか。汝こたる者は、同席も出來ん程身分も違ふとる。それに今は天朝の役儀を勤めて御座る御人の子供さん達に、汝こたる者の子

が無礼すツた何事か。四五年前だつたら、腹切んばならんとぢや。と、酷う御立腹で御座りましたゝい。それで、御覽の通り、虎太郎を召連れて御託に参じました様な次第で、はい。』

『如何云ふ事があつて、浅野さんが其様事仰有るとか、私は些とも知りまつせんたい。』

と母は穩かに答へて居た。

『いや、虎太郎を糺問致しますと、御無礼ばかり致しとつたち云ひますで、はい。今後は其様事は決して無かごつ致させますけんが、何卒御勘弁下されます様に、父の私も共々御託を致しまするで。』

と、虎太郎の父は頻りに託びるのであつた。

母は何処までも其様事のあらう筈が無いと云ひ成して、宅の子供達からも其様事を聞いた事がないのに、浅野が誰から何を聞かれたか知らないがもと／＼子供同志の事だから、託びるの託びられるのと云ふ様な事は置いて、何卒仲能うして下さる様に、お暇の時には遊に御寄越なさる様にと、却つて慰める様に云つて遣つた。

虎太郎の父は非常に喜んで、かへす／＼謝意を述べて辞し去つた。

母は座敷へ入つて來て、私達の傍に座つた。

『金二郎。』と、私を凝乎と見て、『お前も聞いたつたらうが、河原から託びて來たからと云うて、此上憎まれる様な挙動をするぢやなかぞ。全然他国の人の中に交ツとる様なものだから、他と相手にならん事するが可か。解つたらうの。』

『能う解つとります。』

『それならば可か。』

母はまア／＼と云つた様な表情をして、そしてまた糸車に向ふので

あつた。

それから後は、虎太郎が遊に来る様になつた。親くなつて見ると、存外淡泊な男で、私の母も何かと気を著けて遣る様にして居た。虎太郎は私達の為に他の少年と喧嘩する迄親くなつたのであつた。

(八)

親類との關係は、表面上如何と云ふ事は無いけれども、母は此事に最も心を苦しめられて居たらしかつた。けれども、従兄弟達——みな私達とは十から年が長けて居た——は伯母さんくと慕つて来るのであつた。酒井村の磯貝の佐太郎は、二里からの路を月に一度は出て来た。そして来れば酒を強請む、母も一升まではと云ふ約束をして、吃度一升は飲ませて遣る。佐太郎はそれだけ飲んでも、左程酔つた顔もしないで、夜路を掛けて二里の路を高木履からくと歸へつて行くのであつた。

また高良山の続の屏風山の麓の柳阪に住むで居た高松六弥太と云ふ従兄——父の兄の子——は、これは大食が自慢の男で、正月の事であつたが、午前にひよツくり遣つて来て、不平らしい語調で母へ云つた。

『叔母さよ、宅では正月ちうに、雑煮を食せんちいます。此処で食はせておくれんさい。』

『其様事は無かはず。』

『いゝえ、母が食せんちいます。』

『そんなら、お母さんが来なさつたら云うてあげう。』

母が雑煮を作へて遣ると、餅を三十幾片か食つて、やつと満足して辞つて去つた。後に其母から聞くと、初めの鍋を平げて了つて、次の

が出来るのが遅いと云ふ不平から家を飛出して、一里以上の路を雑煮食に出て来たと云ふ滑稽な話もあつた。

『正之尉も金二郎も精三郎も来るが可か。御父さまから朝鮮飴を送つて来たけん。』

母に呼ばれたので、三人とも庭や座敷から茶の間に集つた。妹のおのぶは前から母の傍に居た。博多から父が寄越した飛脚が丁度去るところで、召使は飛脚に庄島の田中と云ふ家を教へにとて共に出て行つた。

『お父さまは朝鮮から博多までお帰りなされて、東京へ出る飛脚船を待つてお居でますとげな。飛脚船が何時著いて何時出るか知れんさうなで、ちよツとも歸つてお居で出来んちうて、御土産だけ送て来たとな。此様沢山御土産貰うたら、三人とももツとく精出さんとならんばの。』

母はにこ／＼しながら、朝鮮飴のペーパーの貼た箱を開けやうとして居る。私達は母の手元を見たり、網袋の中に転つて居る対州名産の乾鰯や鰯を見たりして居た。

『こりや飴ぢや無か。』と、母は覺えず叫んで吃驚した顔をした。

『飴ぢやなかくて。』

私達は失望して叫んだ。

『飴ぢやなか、金。』

『金。』

兄も私も斯う云つて吃度見ると、私にも其字が読まれる一両の太政官札が、ぎつしり箱に塞つて居るのであつた。

母は急いで父の手紙を開封した——先づ子供達を喜ばせてと、残し

て置いた手紙を開いて読んだ。

父の手紙にも深い事は書いて無かつた。太政官札で百両菓子箱に入れて送り置く。この分は浅野を始め話をせずに、手許に貯へ置き、よくくゝの事でなくば手を著くべからずと云注意が書添へてあつた。

『正之尉、何所置いたものかの。』

母も其頃では大金であつた百両の札の置場所に当惑したので、兄にまで相談するのであつた。

沈著いた正之尉も、何所にと云ふ秘密の藏場所を考へ得なかつた。

『好か所があるたい。』と、母は覺えず微笑んで、

『正之尉と金二郎、ちよいと来るが可か。弁が帰つて来ん中に、急いで処置けんば。』

弁と云ふのは頃日病気で暇を取つた婆の代に來た下女の名である。

兄と私とは母の指揮のまゝ、重簞笥を一重づゝ傍へ取除けると、後には簞笥の置台の、中が箱の様に空間になつてのが残つた。母は太政官札を元の箱の儘風呂敷に包んで、其置台の内へ入れて。

『さア、もとの様に積むと可か。』

私は子供心にも成程よい仕舞場合だと思つた。簞笥は直ぐ元の様に積重ねた。

『何人にも話す事はならんばの。』

母は台所から薄刃庖丁を持つて来て、乾鰯を薄く切つて、私達四人に別けて呉れた、鰯甲色を為てる乾鰯の美味なのは、長崎に居る頃から知つて居る私達は、朝鮮鮓以上好きだつたのである。

母は間もなく帰つて來たお弁には、肉の厚い鰯を焼いて裂いたのを小皿に盛つて与へた。

と、翌日の夕刻、お弁を取次に頼んで母へ目通をと請うた男があつた。どうした男かとお弁に問へば、筋向の煎餅屋の亭主だと云ふ。そんな男が何の用があつて來たのか合点が行かない。けれども母は詮方なく逢つて見た。そして來意を聞くと驚くべし、昨日貨幣が届いた事を知つて二三十両拝借を願ひたいと云ふのであつた。

母は顔色を変へた。如何して此事を聞知つたのか、頓と当が著かない、如何しても人に知れべき筈が無いのである。けれども、知られた上はなまじいに隠すのも能くあるまいと思つたので、貨幣は届いて居ると答へた。

『……貨幣はあるが、私の自由にはならんとちやから。お前も知つとるぢやろが、庄島の浅野節三郎さん所へ行て、其事を云うて相談して見るが好か。今宅に在る金も、後程節三郎さんが來て預つて持つて帰られるとちやから。』

煎餅屋の亭主も母に浅野に相談せよと云はれてぎつくりしたらしかつた。浅野節三郎と云へば、音に聞えた厳格な男で、町人なぞが此度無礼なゆすりに等しい事を申出たと知つたら、何様嚴峻な制裁を加へるか知れないからだ。

其処へひよつくり入つて來たのは、父には親い親戚であるが、さまで生活に苦しんでなぞ居ないのに母へ泣言を云つては、金を絞取らうと心掛けてる老人である。

『町人の如たるが、何処の人ぢやろか。』

老人は母へ問うた。母は此老人が悪い折に來たのに迷惑しないでは無かつたが、煎餅屋風情に侮られた腹立まぎれに、男が來た仔細を斯々と話した。

母の話の聞くと、老人はくわツと怒つて、皺の中から底光のする眼を光らせて、煎餅屋を屹度睨据ゑた。

『こん無礼者が、汝はゆすりに来たとか。女子と子供ばかりだと思ふち、憎かぞ汝は。節三郎に云までも無か、おいが、尋常は置かんたい。金二郎さん。其処に抜いた刀を持ち来ちお呉んさい。』

『伯父ちゃんのをえ。』

『うむ、私がと。こん町人斬つちやつで。』

私が老人の刀を持つて来ると入違ひに、煎餅屋は顔の色を灰の様にして飛出して、跣の儘逃げて行つて了つた。戊辰の乱を去る事僅かに四年、未だ多少殺伐の氣風が残つて居たので、煎餅屋は真箇成敗を加へられるものと思つたらしかつたので。

『馬鹿町人めが。』と、老人は苦笑をした。そして母へ云つた。本當に氣を付けござるが能か。女子さんや子供さんばかりで、町人まで侮る。倅でも差上げとかうかの。』

『難有うは御座りまツするばつてん、そんげん事は万事浅野へ相談して、其指揮を受ける様に、弘信から云付けられとりまツするから、節三郎さんに御相談の上で、御挨拶致しますせう。』

老人はそれでもとは云ひかねて、眉を寄せながらむつゝりとして居た。

此老人も酒が好きなので、母は何時でも一口飲ませる事にして居た。老人も飲まない中は帰らぬ事に極めて居た。お弁に對州鰯を焼せて、紙に包んで打せて、綿の様になつたのを裂かせて下物に附けた。

老人は頻りに鰯の美味なるを賞めて猪口を重ねて居たが、纏て昨日届いた金の事に就いて、根堀り葉堀り質ね出した。母は有の儘に答へ

て、唯一言——何時送り返させるか知れぬから手元に藏つて置く様に——斯う附加へた。

『さう云ふ訳で御座りますツから、節三郎さんへも談さん積にしとりました。』

老人は頻りに首肯いて『節三郎に御話しんさる事はなかさ。弘信さんは節三郎を酷う信用して居んさるけれど、どぎやんもんぢやろかと私は思ふとつさ。』

母はそれには返辞を為なかつた。

銚子を一つ代へると、例の痼疾とも云ふべき金談を始めた。そして、斯う附加へたのであつた。

『……弘信さんに顔突合して御相談すツと、屹度否は云ひ御座らん。親しい親類なり、竹馬の友なり、私が御世話をした事もあつてな。』けれども、母はきつぱり謝絶つた。

『ほんに弘信が居りまして、弘信が御聞き申したら、其通で御座りまツせう。でも、私には出来まツせん。二十両三十両と云ふ金は、節三郎さんでも、一応は弘信へ手紙で御相談がある筈の様に思ひますた。いつもく御氣の毒で御座りますツてん。御断り申しまツする。』

老人は何時でもする様に、直ぐに苦り切つた顔をして太息を吐いた。そして、いつもの様に不機嫌になつて、それでも足元の危くなるまで酔つてから辞つて去つた。

母はいつもの老人の癖だと思つて、深くも氣には留めなかつた。けれども、氣掛りなのは、昨日送つて来た金の事である。煎餅屋風情まで聞知つて居る様では、他にも知つた者があると思はねばならぬ。筆筒

の台の内に秘めてある事までも知られて居らうも知れぬ。女子供ばかりでは、万一の時に何と防ぎ様も無い。夫からは手許に置く様にとの命ではあるが、浅野へ託する外に保管の為やうがなと思ふのであつた。けれども、如何したものかと尚ほ思惑うて、浅野へ相談するのに一日く々と延して十日ばかりは過ぎた。

勝が周章した様子をして訪ねて来た。それは日の暮々であつたが、浅野へ呼れて浅野の伝言を伝える為に来たのであるさうな。

『叔母さま、困つた事が出来ました、節三郎さんが酷う立腹しとらつす。』

『節三郎さんが。』

『ない。』

『如何してぢやるか。』

勝は心の優しい青年なので、母へ浅野の言葉が苦痛らしく、おづ／＼と話すのであつた。

浅野が立腹したのは、父が送つて来た金の事であつた。父が浅野へも話さずに、手許へ蔵つて置く様にと云つて来た点が、浅野の感情を害したのであつた。母が浅野へ父の手紙の内容を話しもしないのに浅野が其を知つて居る。そして立腹して居る。父を又無き人の様に尊敬して居る浅野が、父を怒つて居ると云ふのである。さては、彼老人が問ふまゝに話した事に、浅野が立腹しさうな尾緒を附けて話したのに違ひない。と母は早くも推察した。

『私が節三郎さんに逢うて話を為て見たら、節三郎さんの心が解けん事も無かはずたい。』

『どぎやんか知らん、今の鹽梅では酷う立腹しち御座るけん。』

『今夜浅野へ行つて見る事にして。』と、母は考へて居たが、『他に仕様がなかもん。』

其夜母は兄を連れて浅野へ行つた。節三郎は面会した。で、母へは立腹した様子を見せなかつたけれども、何時もの様には打解けないところが見える。

『あなたは女子さんぢやから、私が何も云ふところは無い。弘信さんへ書面を上げといたで、来月は其返事がありまツせう。それ迄は従来の事為とる筈に思ふとつておくんさい。』

節三郎は母が幾度和めても、やはり斯う云ふだけであつた。

『私から東京へ手紙を出す事に致しますツせう。』

母はその夜悉く手紙を出して、翌日勝を頼んで発送の手續をさせた。

浅野の方は父の手紙を待つより外は、これは止むを得ないとしても、困るのは例の老人の悪戯である。どの親類へも、母を其人々に怒らす様な事を話して歩くのであつた。酒井村の磯貝の義姉からまで、意外の手紙を受取つた事があつた。それは、佐太郎が来訪した時事情が解つて、何事もなく済んで了つたけれども、さう行かない親類もあつた。浅野と隔心が出来ない中であると、此様な場合に老人を取押へて呉れたのであるが、今は此老人故に浅野とも妙な意味合になつて居るのではないか。

『お父さまの御手紙を待たんと、長崎へ帰らうかのう。正之尉、金二郎。』

母は斯う云つた事もあつた。兄も私も返辞が出来なかつた。

母は心痛の余りに病氣になつた。そして、時々卒倒したりした。私

達は唯うろくするばかりで、其都度綿屋の後家の世話になりくした。

二月ばかり過つて辛と父から返辞が来た。今月の末には、またく朝鮮へ渡る。其節長崎にて久久の対面を為すべし。且つ其許始め一同達の為に荒木六郎を遣はすべし。長崎にて面会の上、余は朝鮮へ、其許等は東京へ出発する事となるべし。東京には既に邸宅を購ひ置きたり。万事は六郎其地著の上申述べしと云ふ手紙の大意であつた。

『私はまた生きたゝい。』

母は病^と辱^この内^とで斯う云つて、嬉泣きに泣いた。

私は『今月末東京』『六郎さん』などの話を、毎日幾度口にしたか知れない程だつた、荒木六郎と云ふのは、磯貝佐太郎の義弟で、当時東京の開城学校に在学して居たのであつた。(完)

(しもおか ゆか、広島大学大学院人間社会科学科准教授)